

【論考】

筆箱研究

奈良女子大学 文学部

福田 雪穂

目次

1. はじめに
2. 筆箱のあゆみ
 - 2.1. 誕生から戦前まで
 - 2.2. 戦後の筆箱
 - 2.3. 現代の筆箱
3. 筆箱で見る社会
 - 3.1. 技術発達による筆箱の可能性の拡大
 - 3.2. 個人化する社会に対応した筆箱の多様化
4. おわりに

1. はじめに

「文房具」と聞いて、真っ先に思い浮かべるものは何だろうか。おそらく多くの人が、鉛筆やボールペンといった筆記用具を思い浮かべるだろう。そして、これらの筆記用具を持ち運ぶとき、特に学生なら、必ず持っているといっても過言でないものがある。「筆箱」だ(*)。

あなたが学生なら自分や友人たちが今、どのような筆箱を使っているのか、社会人なら学生時代の自分たちがどのような筆箱を使っていたのか、そして今でも筆箱を使っているならその形態を思い描いてみてほしい。その種類は一つに限らず、多種多様なのではないだろうか。一方で、私が小学生になりたての頃は、誰もが直方体の表と裏のふたがマグネット式になっている筆箱を使用していた。

では、人々が使用する筆箱が多様化していくのはいつごろからなのだろうか。そしてその多様化にはどのような要因があるのだろうか。本稿では、筆箱の歴史と現在の筆箱の使用状況から、筆箱の多様化と社会の関係を辿る。

(*)なお本稿では、より古い時代から存在する硯箱や文箱等ではなく、近現代において、学校・塾や職場などで自前の筆記具を使用することを主な目的に、それらの持ち運びを可能にする容器のことを“筆箱”としている。持ち運びを前提とせず、複数の種類の筆記具をひとまとめに収納し、自宅など特定の場所でのみ使用する場合もありうる。

表面に人気アニメのキャラクターが描かれた筆箱が登場した（クツワの歴史 <https://www.kutsuwa.co.jp/company/history/>, ニッポン・ロングセラー考 https://www.nttcom.co.jp/comzine/no073/long_seller/index.html)。

このころ、子どもたちの間で爆発的に流行したのがサンスター文具株式会社の「アーム筆入」だ。アーム筆入は、1965(昭和 40)年に発売され、二年後にはテレビコマーシャルが放送され始めた（NEW アーム筆入 http://www.sun-star-st.jp/private_brand/arm.html）。「象が踏んでも壊れない」というキャッチコピーと、本物の象を起用した CM が話題を呼び、アーム筆入大ヒットにつながったと考えられる。

形状はいたってシンプルな合わせ蓋方式の箱型筆箱だ。この筆箱の強みは「象が踏んでも壊れない」と掲げられるほどの強度を持つ素材からできていることだ。昭和 30 年代後半、世間に広く普及していたのは、前節で紹介したセルロイド製筆箱だった。セルロイドは落としても割れにくかったが、可燃性が高かった。当時の家庭内には電熱器や火鉢など、火種となりうるものがあり、セルロイド製品に引火して事故が起こることもあった。一方で、プラスチック製の筆箱は燃えにくいものの、落としたらすぐに割れてしまうという欠点があった。そのような背景があり、アーム筆入れの素材には「ポリカーボネート」が採用された（NEW アーム筆入 http://www.sun-star-st.jp/private_brand/arm.html）。ポリカーボネートは耐衝撃性が高く、ポリエチレンやアクリルと比較すると、約 50 倍衝撃に強い。また、自己消火性にも優れており、火が移ったとしても燃え広がる心配が少ない。衝撃に強く安全性にも優れている筆箱が誕生したのである。

その話題性と商品性からアーム筆入は大ヒット商品へと成長し、現在でも改良された「NEW アーム筆入」が販売されている（下図。なお以下画像はメーカーウェブページより引用。ぬいぐるみ型のフィギュアポーチ図のみ Amazon サイトから引用）。



発売当初よりも透明度の高いポリカーボネートが本体と中皿に使用されている。大阪府のある小学校では、六年間使える筆箱として学校指定教材にされているほど評価されている（NEW アーム筆入 http://www.sun-star-st.jp/private_brand/arm.html, ニッポン・ロングセラー考 https://www.nttcom.co.jp/comzine/no073/long_seller/index.html)。

アーム筆入と同じころ、磁石によって蓋を開け閉めする箱型のマチック筆箱が登場した。当初は片面だけが開くシンプルな構造だったが、やがて両面識が登場し、1975(昭和 50)年ごろには三面、四面などの多面式マチック筆箱が全盛期を迎えた。中の構造も、単に鉛筆や消しゴムを収納するのではなく、ボタンを押すと引き出しが飛び出したり、鉛筆が立ち上がったたりする子どもたちが楽しめる仕掛けが施されるようになった（ニッポン・ロングセラー考 https://www.nttcom.co.jp/comzine/no073/long_seller/index.html）。

https://www.nttcom.co.jp/comzine/no073/long_seller/index.html)。

次の図は 1976(昭和 51)年にクツワ株式会社から発売された「3 ドア+1 筆入」だ。両面に

備えた広めの収納スペースと表面に小さな収納スペースは、磁石で開くマチック筆箱の要素だ。



それに加え小さな収納スペース部分の裏面は、スライド式の蓋がついた収納スペースになっている。図の下半分にプリントされた筆箱は、女の子・男の子それぞれに向けたキャラクターのイラストが描かれている。色についても女の子向けは赤やピンクがベースに使われ、男の子向けのものは黒や青がベースに使われている。クツワ株式会社は1978(昭和53)年にも多機能マチック筆箱を多数開発し、テレビCMの放送も行った(クツワの歴史 <https://www.kutsuwa.co.jp/company/history/>)。

1980(昭和55)年にサンスター文具株式会社が発売した「5面マチック筆入」は、業界トップの筆箱シェアを誇った(サンスター文具年鑑 <http://www.sun-star-st.jp/company/timeline.html>)。

マチック筆箱と平行してブームになったのが、1970(昭和45)年ごろに登場したロック機能のついた筆箱だ。磁石の反発性を利用した電子ロック筆箱とダイヤルの数字を合わせて開錠するナンバーロック筆箱が主な種類だったようだ。

そして下図はクツワ株式会社の「ロックンロック筆入」だ。



この商品は、1972(昭和47)年にテレビCM放送が開始された。この商品はダイヤル式ロックの筆箱だったようだ。ポスターに乗っている筆箱のカラーバリエーションは、青、赤、黒だ。同じくクツワ株式会社が1974(昭和49)年にテレビCM放送を開始した筆箱たちのポスターのカラーバリエーションを見てみると、ベースの色はほとんどが青、赤、黒のいずれか、あるいはそれに近い色だ。これらの三色が当時の筆箱の色の主流であったのだろう(左図/クツワの歴史 <https://www.kutsuwa.co.jp/company/history/>)。



多面式マチック筆箱やロック機能付き筆箱は、その玩具性から子どもたちに人気を博したが実用性に乏しく、ブームは急速に冷めていった。

その反動のように次に現れたのは、蓋を開

け閉めするだけの構造をベースとしたシンプルな缶ペンケースだった(ニッポン・ロングセラー考 https://www.nttcom.co.jp/comzine/no073/long_seller/index.html)。大きさにも変化が見られ、以前の多機能筆箱は構造上大きなものが多かったが、缶ペンケースは片手で握れるほどの細身のものが主流だった。構造はシンプルだが、表面にはイラストが描かれたものが多数存在した。子どもたちは、自分の好きなイラストがプリントされているものを選ぶようになったと思われる。

多面式マチック筆箱やロック機能付き筆箱は、筆記用具入れという筆箱の役割の範囲を超えた玩具性を帯びており、当時の子どもたちの人気を集めた(ニッポン・ロングセラー考 https://www.nttcom.co.jp/comzine/no073/long_seller/index.html)。また、アーム筆入に関しても言えることだが、テレビ CM というメディアの効果も大きかったと考えられる。1970(昭和45)年のモノクロテレビの世帯普及率は90.2%、1980(昭和55)年のカラーテレビの世帯普及率は98.2%¹とともに高い水準を誇っていた。メディアによって生み出され、移り変わる流行の姿を筆箱の変化に見ることができる。

また、筆箱の色や表面のプリントは、男の子向け/女の子向けのものに二分される。子どもたちが使用する筆箱にはジェンダー差があったようだ。

2.3. 現代の筆箱

筆箱のあゆみを辿るこの章の締めくくりに、現代の筆箱を見ていこう。

ネットショッピングサイト Amazon(<https://www.amazon.co.jp/>)にて「筆箱」と検索をかけたところ、五万件以上の商品がヒットする。大きさや素材、カラーバリエーションどれをとっても前項に登場する筆箱たちとは比べ物にならない程多種多様だ。すべてを網羅するときりがないので、現代的な特徴を持つと筆者が思う筆箱を三つ紹介する。

*

一つ目は下図のようなぬいぐるみ型筆箱だ(この製品は、NICI フィギュアポーチ)。

このタイプの筆箱のいちばんの特徴は、言うまでもなく見た目だろう。ぬいぐるみ型筆箱はほとんどが動物をモチーフにしたもので、見た目がかわいらしい。胴体が収納部分になっており、顔や手足のパーツには綿が詰まっている。表面の布はぬいぐるみに使われているものなので手触りがよい。しかし、鉛筆や消しゴムを多用する場面においては汚れやすいといったデメリットもある。収納部分もそんなに広くはない。持ち運びの際にもかさばってしまう。



¹ 藤竹暁・竹下俊郎(2018)『日本のメディア[新版]伝統メディアはネットでどう変わるか』p 76 NHK 出版

ぬいぐるみ型の筆箱は、前節の筆箱と同じように玩具性が見られる。しかし、前節の筆箱たちに見られた玩具性が、収納口の多さやロック可能な蓋といった機能面に見られたのに対して、ぬいぐるみ型筆箱はその見た目に強烈な玩具性が表れている。これは、筆箱に求める機能が文字通り、「筆記用具を収納して落ち運ぶことができる箱」であることだけで、それ以上は求めなくなったということなのではないだろうか。そして数あるぬいぐるみ型筆箱の中からお気に入りの一つを選び持ち運ぶ。自分の好きなものを常に目に入るところに置き、その見た目から癒しをもらいたいという心の現れなのではないだろうか。

二つ目は、下に図をしめすような直立式の筆箱だ（サンスター文具株式会社 DELDE）。

これまでの筆箱は直方体型や円柱型のものを横倒しに置くのが主流だった。しかし近年、筆箱をペン立てのように机の上に立たせ、中身がすべて見えるようなものが発売されるよ



うになった。サンスター文具株式会社が発売しているこの DELDE の筆箱シリーズは、布製ポーチ型筆箱の上半分を下にスライドさせて机の上に立たせる。デザインは非常にシンプルで男女どちらも使いやすい。缶バッジなどをつけて自分だけのオリジナル筆箱にアレンジすることもできる。他の文房具メーカーもこのよ

うな直立式の筆箱を販売している。

直立式筆箱登場の要因を考えてみよう。まず、筆箱の中身がすべて見えることが求められたことが考えられる。現代の学生は、鉛筆と消しゴムだけでなく、カラーペンや修正テープ、ハサミやノリも筆箱に入れて持ち運ぶ。横倒し式の筆箱では、筆箱の中身が増えれば増えるほど、使いたいものを取り出すのに時間がかかる。直立式の筆箱は自宅の机の上においてあるペン立てと同じ要領で必要なものを取り出すことができるので、わずかなものではあるが手間を省くことができる。また、直立式筆箱は必要とする机の面積が横倒し式のものに比べて少ない。学校で使われている学習機の面積は限られている。筆箱を置くのに必要な面積が小さくなることで、少しだけ机が広々と使えるようになる。このような点に直立式筆箱のニーズがあったと考える。

三つめは、クリア筆箱だ。クリア素材といえば、プラスチックが思い浮かぶ。アーム筆箱の材料であるポリカーボネートもクリア素材だ。クリア素材でできた筆箱は一昔前にも存在していたが、ここではクリア素材の持つ意味合いが異なる。一昔前のクリア素材でできた

筆箱は、軽量性や加工のしやすさ、耐火性・耐久性からその素材が採用されていた。しかし、現代の筆箱にクリア素材が選ばれる理由は、透過性にあると考える。クリア素材の見た目の



特徴は中身が透けて見えることだ。

左に図を示したコクヨ株式会社のツールペンケース「ピープ」は、ウェブサイトにて三つの特徴が挙げられている。

一つ目は「#01 お気に入りの文具は見せて収納！」だ。このフレーズから、中身を見せるためのクリア素材であること窺える。二つ目の特徴は「#02 小物ポケット付きインナーケース！」だ。前述の直立式筆箱が求められたのと

同様、多くの文房具を詰めて持ち運ぶ筆箱に、整理機能が求められたのだろう。三つ目は「大きく開く！」だ。この特徴も、中身が多くなってしまったとしても目当てのものが探しやすいように、ということなのだろう。

クリア素材についての話題に戻そう。筆箱以外のモノ、カバンやポーチにもクリア素材の流行が見られる。現代のものはカラフルで、一つ一つデザインにこだわったものが数多く存在する。そのひとつひとつを買い手がこだわりを持って選んでいるのだとしたら、持ち物の組み合わせから自分をおしゃれに飾り立てたり、好きなものに囲まれたりすることができる。それを外から見えるようにして、自分をアピールすることが人々に求められているのではないだろうか。

この項の冒頭にも書いたように、現代の筆箱は色、形、素材、大きさ、どれをとっても様々だ。さまざまなバリエーションが存在するという点から、現代の人々の好みがそれまで以上にばらばらで、個別のニーズがあるということがみてとれる。

3. 筆箱で見る社会

前節で、筆箱登場から現在までを三つに区分し、そのあゆみをたどってきた。この変遷はなにを意味しているのだろうか。筆箱の変化には、社会の変化そのものが映し出さされているのではないだろうか。そのような観点から、以下では、筆箱の変化をもとに社会の変化を考察する。なお、前述したように今回調べた限りでは、戦前の筆箱に関する十分な資料を得ることができなかったため、戦後以降の筆箱及び社会に関して論を展開する。

取り上げたいのは二つの論点だ。一つ目が「技術発達による筆箱の可能性の拡大」、二つ目が「個人化する社会に対応した筆箱の多様化」だ。

3.1. 技術発達による筆箱の可能性の拡大

周知の通り、戦後日本は鉄鋼・造船・自動車・電気機械・化学などの部門で、アメリカの技術革新の成果を取り入れて設備の更新がなされた。こうした重工業の発展は、その技術の伝播や部品生産の裾野の広がりなどによって軽工業の新たな展開にもつながるのであった。

筆箱の世界においても、加工技術や印刷技術の発達により、使用できる材料の幅が広がり、筆箱の形体のバリエーションは増加し、表面にはプリントを入れることも可能となった。こうした筆箱の形体の変化や選択肢の増加だけを観察しても、戦後の日本社会が経てきた大小さまざまな技術的発展の軌跡や社会が豊かになっていく様子が見て取れるのである。

3.2. 個人化する社会に対応した筆箱の多様化

70年代から80年代前半に登場した筆箱は、玩具性を帯びていた。また、テレビという大きな影響力を持つメディアの普及も重なり、筆箱のモデルに流行が生まれた。流行が生まれたことにより、周りと同じ面白みのある筆箱を持つことを求めるようになったのではないだろうか。

さらに、このころには大きく分けると暖色系と寒色系に二分することができるカラーバリエーションが提示されている。表面にプリントされたイラストも、明らかに男女それぞれに向けたものがなされている。

ではいったい、筆箱に見られる二分されたジェンダー差は、いつごろから顕著になったのだろうか。明治期から変遷を経てきた筆箱に、女子用・男子用といったデザインの差異化があったのかや、それが色調によるものなのか、絵柄のモチーフによるものなのかなど、今回は突き止めることができなかったが興味は尽きない。

以下に少し触れるように、ランドセルの色におけるジェンダーが話題や論題になることがある。しかし、男女が同じものを使うという意味では、筆箱の方が百年単位のより長いスパンで、ジェンダーイメージの変遷を明らかにしてくれそうだ。

たかが筆箱、されど筆箱。筆箱は、近代日本の子どもの世界のジェンダー構造の変遷を、顕著かつ可視的に示してくれる格好の指標なのかもしれないのだ。

そして、現代の筆箱はジェンダー的観点から言うと、男女どちらでも使用できるカラーバリエーションやデザイン、形体のものが数多く存在する。もっと個別の観点から見ても、筆箱はそれに対応しようとしているように思われる。素材でいえば、プラスチック製、布製、缶製……、もっとさまざまな種類があるだろう。形体に関しても直立式、ぬいぐるみ型、ポーチ型……があり、戦後に登場したマチック式筆箱も、現在でも小学校低学年を中心に使用され続けている。数えきれないほどの選択肢の中から、ユーザーは自分に合ったものを選び使用するのが。現在、筆者が通う大学では、同じ教室に同じ筆箱を持つ人が二人存在することはほぼない。こうした筆箱の多様化は、個人化が進む社会のニーズに合わせてのことなのだろう。

筆者が小学校高学年に上がる 2010 年ごろ、ランドセルにも同じような現象が見られた。筆者の所属した学年は、男子のほとんどが黒のランドセル、一部青や緑のランドセルを使用し、女子のほとんどが赤のランドセル、一部ピンクのランドセルを使用していた。2010 年ごろになると、新入生の中には女の子が茶色のランドセルや水色のランドセルを使用するのが見られるようになった。表面に刺繍が入ったランドセルを使用している子もいた。これもまた現代社会に見られる個人化現象の一つなのだろう。

4. おわりに

今回の筆箱研究にあたって、たいみち氏が挙げておられるもの以外には戦前の筆箱の資料がなかなか見つからず苦戦した。筆箱は最も身近な文房具の一つであるように思うが、身近すぎるからこそあまりスポットが当てられてこなかったのだろうか。

筆箱のあゆみを辿って現在までの社会変化を考察したが、これからの筆箱はどのように変化していくのだろうか。技術がますます発達し、ますます多様化が進んでいくのだろうか。それとも現代誕生した筆箱は、一時代の流行として姿を消し、特徴の削がれたシンプルな形体のモノだけが残っていくのだろうか。変化が訪れるとガラッと変わってしまうのが今の時代だ。技術やジェンダーだけでないより広い視野で、筆箱における変化に今後も注目していきたいと思う。

【参考ウェブサイト】

たいみち 文具のとびら：【連載】文房具百年 # 13 「筆箱 その 1」

<https://www.buntobi.com/articles/entry/series/taimichi/009345/>

たいみち 文具のとびら：【連載】文房具百年 # 14 「筆箱 その 2」

<https://www.buntobi.com/articles/entry/series/taimichi/009512/>

たいみち 文具のとびら：【連載】文房具百年 # 15 「筆箱 その 3」

<https://www.buntobi.com/articles/entry/series/taimichi/009686/>

コクヨ株式会社：ツールペンケース 〈ピープ〉

<https://www.kokuyo-st.co.jp/stationery/toolpencase/piiip/>

クツワ株式会社：クツワの歴史

<https://www.kutsuwa.co.jp/company/history/>

NTT コムウェア株式会社：ニッポン・ロングセラー考 Vol.73 アーム筆入

https://www.nttcom.co.jp/comzine/no073/long_seller/index.html

サンスター文具株式会社：DELDE

<https://www.delde.jp/product/basic.html>

サンスター文具株式会社：NEW アーム筆入

http://www.sun-star-st.jp/private_brand/arm.html

サンスター文具株式会社：サンスターアーム筆入 TVCM 集

<https://www.youtube.com/watch?v=JGF40j7H9rw>

サンスター文具株式会社：サンスター文具年鑑

<http://www.sun-star-st.jp/company/timeline.html>

*

■本稿書誌情報■

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

〔2020 年度「文化社会学演習」WEB 版報告書〕 <https://bungu-narajo.org/>

2020 年 8 月 1 日 編集・発行 国立大学法人奈良女子大学文学部

人文社会学科文化メディア学コース 小川伸彦研究室編

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 E-mail ogawanobuhiko@cc.nara-wu.ac.jp